月下美人としゃぼん玉　　黒田　朔

月下美人の花である。3 年前にもらった葉を挿し木したものが成長、ようやくこの 10 月に花が咲いた。花は昼頃蕾が膨らみ、夜に咲き、次の日には萎んでしまった。一夜だけの花である。花言葉は「儚い美」等である。「儚さ」は日本人の心にささる。童謡にも儚さが感じられる歌も多い。

「しゃぼん玉飛んだ　‥‥」

「しゃぼん玉」は、野口雨情作詩の日本の童謡である。実はこの歌詩は、生後 7 日目で亡くなった雨情の長女みどりちゃんの死が背景にあると言われている。雨情はある日、しゃぼん玉遊びをしている子どもたちを見て、生きていたらこの子たちと同じくらいの年齢のみどりちゃんを思い出し、この歌詩を書いたようである。

「屋根まで飛んだしゃぼん玉」「飛ばずに消えたしゃぼん玉」

しゃぼん玉のようにはかない人生。簡単に壊れて消えてしまう人のいのち。　だから「かぜ、かぜ　ふくな」と願うのでしょうか。

「シャボンだま　とんだ　やねより　たかく　ふうわり　ふわり　つづいて　とんだ
シャボンだま　いいな　おそらに　あがる　あがって　いって　かえって　こない
ふうわり　ふわり　シャボンだま　とんだ」

後半は、二度と帰ってこない寂しさがあっても「ふわりふわりとシャボン玉のように天に昇っていった」と考えれば、いくらか安らかな気持ちになる。

この歌は悲しみだけでなく、その死の向こうに永遠のいのちの希望がある、もう一度天国で会えるんだという、悲しみの向こうにある希望、死は決して終わりではないという、雨情の心を感じる詩であると思った。

わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。（ヨハネの福音書　11 章 25 節）